

第2編2章解説

第1章で見たように、濁水問題は複合的な問題となっている。この複雑な問題を扱うには、いろいろなモニタリング手法を用いて実態の把握をする必要がある。そこで、本章の前半部（第1節）では主に自然科学的視点から、そして後半（第2節）では主に社会科学的視点から、琵琶湖－淀川水系の流域環境のモニタリング手法に関する研究を紹介する。

本プロジェクトでは、対象をスケールによって階層化し、マイクロ視点、メソ視点、マクロ視点に分けた。第1節では、スケールアップの方向にそれらの視点をたどることによって、順にみていく。まず第1項において、自然科学的視点の研究において扱う分析項目や環境指標について簡単に解説する。特に本プロジェクトにおいて強調する安定同位体指標については少し詳しく解説する。第2項では、マイクロレベルの問題について扱う。稲枝地区において圃場の管理、特に実験的に代かきのやり方を変えてみることにより、圃場から流出する物質がどのように変化するかを考察する。第3項ではメソレベルの視点から、発生する代かき濁水が稲枝地域の小河川を中心にどのような影響を与えるか検討する。第4項では、これらの水系が琵琶湖に与える影響を検討するため、琵琶湖全体に対する各流入河川の影響をマクロレベルから考察する。第5項では、これらの琵琶湖流入河川が琵琶湖に与える影響、またそれより下流の淀川水系に及ぼす影響についてもっとマクロな視点から研究したものを紹介する。本プロジェクトは、これらの研究を通して、農家の排水管理といったマイクロスケールの事象から、小水系への影響といったメソスケールの事象、琵琶湖流入河川に対する各河川の寄与といったマクロスケールの事象、さらに琵琶湖や淀川水系全体の事象までを扱った。第1節では、大きくスケールの異なる研究を通して、水系のつながりが引き起こす「濁水問題の下流側」の問題を紐解いたといえる。

以上の第1節に対して、第2節では「濁水問題の上流」に視点を移していくことになる。まず、第1項においては、濁水問題の背景にあって、濁水問題を生み出す構造的要因になっているメソレベルの農業構造の変化を明らかにしている。まず、稲枝地域における第二次世界大戦後の歴史的変遷を、農業政策の方向性や経済状況との関連から整理した上で、2000年の農業センサスの経営指標から集落を検討、類型化し、農業経営再編の現段階と担い手の状況を明らかにしている。そして今後の稲枝地域の農業の展開可能性を考察している。第2項では、マクロ的な視点から、アグロツーリズムに焦点をあてている。滋賀県内の代表的なアグロツーリズムを類型化し、その上で、アグロツーリズムの潜在的なポテンシャル評価のための項目を設定し、項目ごとに指標を定め、主として既存の公開データを使用して市町村レベルでの指標値を計算した。その結果を、GIS上でポテンシャルマップ（潜在適地評価地図）として可視化している。第3項は、流域管理を実践する地域社会の状況理解を表現するために開発した指標を紹介している。具体的には、流域圏に存在する自然環境に対して地域社会が与える価値指標と、流域管理における地域社会の社会関係資本に関する価値指標を導出し、総合的な流域管理を実践する地域社会構成員らの潜在意識を定量化することを目指したものである。

脇田健一
陀安一郎